

理想自己の決定主体：母娘関係と友人関係のノンバーバル・コミュニケーション比較

著者	木村 純子, 坂下 玄哲
出版者	法政大学経営学会
雑誌名	経営志林
巻	46
号	2
ページ	11-23
発行年	2009-07
URL	http://doi.org/10.15002/00008134

〔論文〕

理想自己の決定主体

— 母娘関係と友人関係のノンバーバル・コミュニケーション比較 —

木村純子 / 坂下玄哲

目次

1. はじめに
2. 既存研究とプロポジション
3. 方法論
4. 理想自己決定プロセスにおけるデータの解釈
5. ディスカッション

1. はじめに

ライフステージの移行期において、私たち消費者は、しばしば自らの自己像を変えようとするのが知られている。たとえば、高校や大学などへ進学する時や、就職して社会人となる時、結婚して所属する世帯が変わる時など、それまでの自分のイメージを刷新し、新しい環境における別の自己像を創出しようとする。

市場においても、就職活動中の大学生向けのスーツ販売や、新婚世帯向けの商品展開など、このようなライフステージの移行期に注目したさまざまなマーケティングが展開されている。特に、学生から社会人へと移行する段階にある大学生向けのファッション商品にはさまざまなものがあり、雑誌やインターネットなどの媒体においても大きく取り上げられている。

このような移行期において、消費者が抱く憧れやなりたい姿をさしあたり理想自己と呼ぶならば、その実現に向けて消費者はさまざまな購買行動を活用することが指摘されている。通常、購買行動において具体的な理想自己像の決定を行うのは消費者本人である。しかしながら、その決定プロセスは彼らがおかれた状況によってさまざまな姿をとることが知られており、したがって、理想自己を決定する主体も変わってくることが予想される。

本稿は、消費者が理想自己像へと近づくためのプロセスにおいて、彼らの購買行動における同伴

者の影響に焦点を当てる。具体的には、大学生から社会人へと移行する女子大生が、自らのイメージチェンジのために同伴者と一緒に行うカタログショッピングという現象を取り上げる。その上で、そこで生起する理想自己の決定プロセスにおいて、同伴者との異なる関係性—母親か友人か—がいかなる差異を生み出すのかについて考察する。

以下では、理想自己に関するこれまでの研究を整理し、その決定プロセスに影響を与える存在としての「重要な他者」について説明する。その上で、同伴者との関係性の特殊性について、母親と娘の関係と、娘と友人の関係について述べる。続いて、理想自己の決定プロセスにおいて生起するコミュニケーションのうち、本稿が特に注目するノンバーバル・コミュニケーションについて、その性質を説明する。以上の理論レビューから、本稿が掲げるプロポジションを提示する。続いて、方法論の提示、および、本稿が実施した調査の具体的内容について説明する。収集されたデータの解釈についてまとめた上で、本稿によってもたらされた発見物、および、課題と展望について述べる。

2. 既存研究とプロポジション

2.1. 理想自己と重要な他者

「理想自己 (ideal self)」は「個人がそれに最も高い価値をおいている自己概念」のことである (Rogers 1959)。消費者は理想自己に近づくために、購買行動を利用することが知られている (Belk 1988; McCracken 1988)。特定の財やサービスを購買し消費することによって、商品やサービスの中に自己を拡張し (Extended self)、好ましい自己概念を創出することができるのである (Belk 1988; Schouten 1991)。

消費者の自己概念にとって理想自己は重要であ

るため、通常は、消費者本人が自身の理想自己を決定する。その際、消費者は強く動機づけられ、主体的に行動することが知られている。

消費者が理想自己を決定するとき、「重要な他者 (significant other)」が承認することが指摘されている (Mead 1934)。重要な他者には、両親や先生、友人やクラスメートなどの消費者本人に關係の深い人物から、消費者が日常的に接するマス・メディアなど、幅広いものがあることが知られている。

言うまでもなく、重要な他者は、承認を通じて消費者の理想自己の決定プロセスに大きな影響を与える。しかしながら、消費者が決めた理想自己への単なる承認をこえた影響をもつ場合がある。すなわち、消費者自身ではなく、重要な他者自身が、消費者の理想自己を外的に与え決定することがある。

冒頭でも述べたように、消費者の理想自己の決定主体は、同伴者との關係性によって異なったものとなり、結果として理想自己の決定プロセスも異なったものとなる可能性がある。本稿の文脈に則して述べるならば、母娘という關係性と、友人同士という關係性において、娘の理想自己の決定主体と決定プロセスは異なる。以下では、両者の違いについて順に考察する。

2.2. 關係性の特性

(1) 母と娘との關係

ホフマン (1984) は、青年期の心理的な独立過程として次の4つを挙げている。1)機能的独立：両親の援助なく友達と遊んだり、休日を過ごしたりと、個人的で実際的な問題を管理し、それに向かうことのできる能力、2)態度的独立：青年と両親間の態度、価値、信念などに関する分化と、独自の自己像、3)感情的独立：両親からの承認や親密な關係、一緒にいたい気持ち、感情的サポートを受けることに対して過度の欲求にとらわれないこと、4)葛藤的独立：両親との關係の中で過度の葛藤的感情 (罪悪感、不安、責任感、抑制、憤り、怒り)を抱いていないことである。青年期の若者は、機能面、態度、感情、葛藤的感情面で、徐々に両親から離れていく。ところが、日本の伝統的な母娘關係では、4つの側面における娘の独立は明確に起こっていないようである。

(a) 母親の期待と支配

母親は娘に支配的な態度を取ると言われている

(Lerner 1998)。母親が娘を支配するのは、単なる権力欲ではない。次の過程を経て、母親の支配は生じる。第1に、母親は自分と娘を同一化する¹⁾。第2に、同一化した娘に関する「無限の責任感」が発生する。子供が成長するにつれて、「無限の責任感」は娘への「期待感」に変わる。母親は、娘にとって自分がすべての起源=過去であるという意識を持つ。自分が過去であるという意識は、娘は母親自身にとってすべての希望=未来であるという意識に反転する。支配的な母親の意識を構成するのは、度を越した責任感と、度を越した期待感である。

母親は娘を支配することで、娘に自分への同一化をうながすのだが、このような支配は通常はコミュニケーションによって行われる。母親によるコミュニケーションには、言葉によらないものも含んでいる。

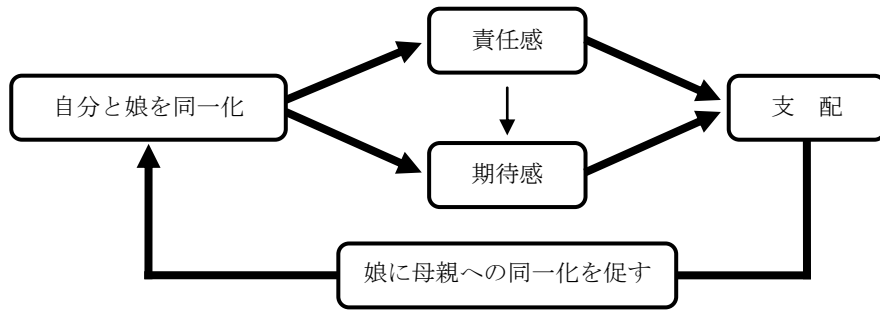
母親からの娘に対するコミュニケーションには、2つの水準がある。第1は、言葉が母親自身の身体を語ってしまうという「事後性」の水準である。娘に向けた言葉は、母親自身の願望を含めた自らを語る言葉である。第2は、言葉がいずれ娘に反映されるという「予見性」の水準である。自分の事後と娘の予見という2つの水準を持つ言葉を通じて、母親は自身の期待を娘に伝達する (Jacobson 1964)。

(b) 支配—依存關係

母親の支配を受ける娘は、どのように感じているのであろうか。娘は母親の支配から逃れたいと感じているという議論がある (Bruch 1978)。娘は、母親の言葉を生きることを強要される。母親は自信を持って子供に接している。その接し方は時として子供の欲求とはかけ離れたものになっている。子供は、自分が親から支配され過ぎていると感じがちである。傍目には恵まれた家庭に見えても、子供は母親の期待や拘束で自由を奪われていると感じる²⁾。

本稿は、斎藤 (2004) にない、必ずしも子供は親に自分の自由を奪われているとは感じていないと考える。娘への母親の支配は、ごく幼い時期から、双方ともほとんどそれを自覚することなしに始まる。母親にとって、娘は自分と同性で、男子よりもか弱く従順な存在である。母親は、娘に母親の支配を受け入れることを無意識に期待する。娘は、母親の期待を十分に理解し素直に支配を受け入れる。時には、母親が自分に愛情を注ぐことをやめると空虚感を味わうことさえあるのである。

図1 母親の娘に対する支配



(2) 娘と友人の友情関係

思春期を過ぎ、大学生になった娘とその友人は、インターパーソナル・リレーションシップを大切にしている。

そのような友人関係の成立要因は、「相互的接近」「有機的好感・同情・愛着」「人格的尊厳・一致・共鳴」「集団的協同」である(田中 1975)。友人に期待する要素は、「援助と支援」「ポジティブな関心」「力強さ」「類似」「真正さ」「自己開示」であるとされる(La Gaipa 1979)。

(a) 自己モニタリングによる同調

一般的に、女性の友人関係は情動的であると言われている。女性は、親友に、物事について同じように感じてくれることを求める(Wheeler & Nezlek 1977)。友人関係においては、お互いに、相手に自分への同調を求めるプロセスがくり返されるのである。

同調は、自己モニタリングによって可能となる。自己モニタリングとは、状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切なかを観察し、自己の行動を統制することである。自己モニタリングには、外向性、他者志向性、および演技性の3つの下位尺度がある。「外向性」は、社会的な事柄への関心が高く社交的な特性である。「他者志向性」は、ある状況で適切な行動をとることへの関心が高く、自己の感情を統制する特性である。「演技性」は、他者を喜ばせたり会話が流暢であったりする特性である。

Snyder(1974)は、自分が置かれている状況や周りの人たちの反応を敏感に察知し、その状況に応じて、自分の見せ方や振る舞い方を適切に合わせるタイプを「高自己モニタリング」と呼んでいる。一般的に若い世代においては、自己モニタリング

が高いと言えるであろう。なぜならば、若者は、相手の気持ちに気を遣い、周囲の人に自分がどのように映っているかを敏感に察知し、自分をその場その場にあわせて行動修正する他者志向性が高いと考えられるからである。気遣いが進むと、相手の気持ちやメディアが伝えるステレオタイプ的な若者の姿に自分を合わせるという「演技(パフォーマンス)」さえ起きるとされる。

(b) 友人と理想自己

Blos(1962)は、友人関係に、モデル機能があることを主張している。若者は、友人を通して、自分を振り返り、自分自身についてのイメージを形づくる。規範(モデル)としての友人であり、親友のイメージが自分の理想のイメージになる。その理想イメージは、実際の自分を形づくるための羅針盤の役割を果たす。自分が友人の姿に同化することで、自己形成が進むのである。

(3) 理想自己の決定主体

ここまでの議論をまとめると、母娘関係、娘友人関係について以下のことが言える。まず、日本の伝統的な母親と娘は、他のインターパーソナル・リレーションシップには見られない、特異な関係性を構築している。特異とは、1)支配と従属(娘の依存欲求)、および2)「娘に対する母親の期待」と3)「母親に対する娘の同一化」である。

娘が築く若者同士の友人間の関係性にも特徴がある。1)自分をその場その場の状況に合わせる高自己モニタリング、2)同調を表現するための演技である。そして、この関係性の特異性は、娘が母親や友人と理想自己の決定に向けた購買行動をとる際、その決定プロセスに差異を生じさせる(図2)。

図2 関係性における理想自己の決定モデル

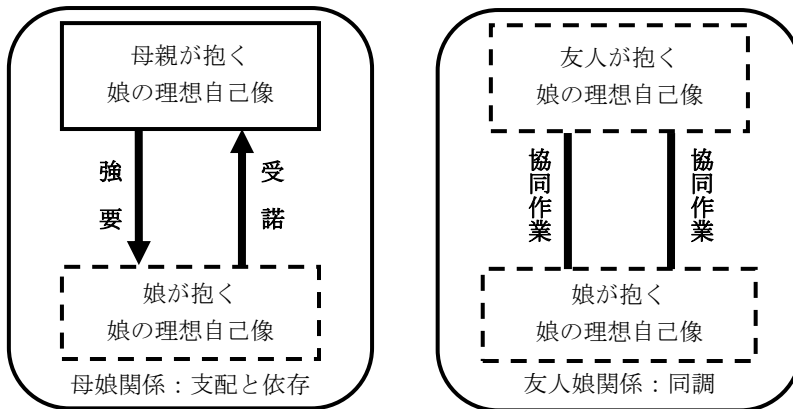


表1 母と娘との関係と友人と娘との関係における理想自己決定過程

	母親と娘との関係	友人と娘との関係
関係性の特性	支配と依存	同調
理想自己の決定主体	母親	友人と娘の共同作業
理想自己の決定時点	プロセス開始以前	プロセス中
理想自己の決定プロセス	強要受諾過程 (Coercive Process)	共同作業過程 (Collaborative Process)

母親と娘との関係では、二人が話し合う前に、母親がすでに娘の理想自己を決定している。娘と母親は理想自己の決定プロセスを割愛する。娘は、自分の意見が、母親が決定した自分の理想自己に即しているかどうかを逐次確認していくというコミュニケーションを行う。本稿は、この理想自己決定プロセスを強要受諾過程 (Coercive Process) と呼ぶ。

他方、友人と娘との関係では、娘と友人はお互いに相手に同調しているという演技をしながら、共に協調的に理想自己を決定する。本稿は、この理想自己決定プロセスを共同作業過程 (Collaborative Process) と呼ぶ。関係ごとのプロセスを比較したものが表1である。

2.3. 理想自己の決定フェーズにおけるノンバーバル・コミュニケーション

(1) ノンバーバル・コミュニケーションの定義と役割

ノンバーバル・コミュニケーション (以下、

「NVC」と記す) は、非言語的コミュニケーションであり、それには4つのタイプがある。1) 身体動作、2) 空間行動、3) 準言語、4) 身体接触である。NVCは、バーバル・コミュニケーション (言語的コミュニケーション) に比べて、状況によってより大きく意味が変わるという特徴がある。例えば、デートの時に相手を見つめる恋人の視線行動は好意を、足を踏まれた人が相手を見つめる視線行動は敵意を意味するように、その場その場でその意味を大きく変える。

NVCには主に2つの機能がある。第1に、協同的な相互作用を活性化する機能であり、たとえば傾きや身ぶりは、会話の展開を調整し、相互作用を促進する機能を持つ。第2は、社会的統制機能であり、個人が他者に対して特定の影響を与えるための道具である。特定の影響とは、支配、説得、印象操作のことを指し、例えば、微笑や傾きは、相手への好意度を高め、印象操作 (自己呈示) を助ける。

NVCにはいくつかの動作があるが、主に観察の

容易性という点から、本研究は特に1)相手を見る、2)目が合う、3)頷くという3つの動作に注目して観察し、解釈する。

(a) 相手を見る

相手を見るとは、凝視 (gaze) する動作である。凝視は、視線行動の中で、焦点を絞ってじっと見つめることである。凝視は、単独で特定の情報を伝えず、身振り、表情、姿勢など他の非言語的行動と結びついて特定の意味を示す。

凝視には7つの形態がある(福原 1975)。1)一方視(相手の目を中心とした顔方向への一方的な凝視)、2)顔面への凝視(顔に対する一方的凝視)、3)目への凝視(目に対する一方的凝視)、4)相互凝視(二者間相互の顔面への凝視)、5)アイ・コンタクト(二者間相互に目を見ていて、相手に凝視されていることに気づいている)、6)凝視の回避(相手を見ることを避ける)、7)凝視の脱落(相手との視線の交錯を避けようとする意図がなく、相手を見ていない)である。

(b) 目が合う

目が合う(アイ・コンタクト)とは、相手を見る動作(凝視)の1つで、視線の一致を意味する(福原 1975)。アイ・コンタクトの機能は4つある。1)情報探索機能、2)情報伝達機能、3)感情表出機能、4)相互作用調整機能である。1)情報探索機能は、相手の感情や態度を探るために相手の目を見ることを指す。2)情報伝達機能は、自分の意思を相手に伝えるために相手の目を見つめるものである。3)感情表出機能は、個人の好意的感情を表すために相手の目を見つめるものだが、文脈によっては敵対的感情を表すこともある。4)相互作用調整機能は、会話の交代が円滑に進むように二者間の会話を調整するために相手の目を見つめる行動を指す。

(c) 頷く

頷くとは、首を縦に振る動作であり、表象的動作の1つであると考えられる。表象的動作とは、言語と同じように、特定の意味を持つ動作である。同一文化に属するメンバーは、表象的動作の意味を知っている。例えば、頭を縦に振るという頷く動作は、肯定、同意、重要を表す。

本稿は、同伴者との異なる関係性が異なる理想自己の決定プロセスをもたらすことについて探るために、母娘ペアと娘友人ペアという2つの異な

るペアにカタログショッピングを行わせ、そこでかわされるコミュニケーションにおける NVC の頻度の比較を行っている。以下では、異なる関係性ごとに NVC がどのように変化するかについて考察する。

(2) 関係性ごとの NVC の意味と回数予想

(a) 相手を見る

母娘関係という関係性は、支配と依存関係であり、母親が娘に一方的に意見(母親が決めた理想自己)を強要する。娘は、自分の意見と母親が決めた理想自己が同じかどうかを母親に確認する。

友人関係という関係性は同調関係であり、友人は理想自己を娘と共同で創る。友人も娘も、自分の意見が相手の意見と合致しているかどうかを逐一確認する。両者はお互いに自己モニタリングを行っており、必要であれば、相手の意見に合わせる演技を行う。同調しあっている関係であることを維持し続けなければならないため、相互に頻繁に見て、相手の反応を確認する必要がある。

したがって、理想自己が明確に決まっている母娘ペアよりも、理想自己が明確に決定していない友人ペアの方が、相手を見る回数は高くなると予想される。主体ごとで述べると、1)娘が、相手との同調を大切にすると友人を見る回数の方が、母親の理想自己を確認するために母親を見る回数よりも多くなることが予想される。2)母親は、娘の反応を確認する必要がないため、娘をそれほど見ないだろう。また、友人は、娘との同調を維持しなければならないため、娘をより多く見ると考えられる。

(b) 目が合う

母娘関係という関係性で、母親が先に視線を送って娘と目が合うとき、「母親は自分が決めた理想自己を娘に強要する行為」と「娘が母親が決めた理想自己を受諾する行為」が同時に実現する。娘が先に視線を送って母親と視線が合うとき、「娘が母親の理想自己が自分の提案と合っているかを確認する行為」と「母親が娘の提示した意見を承認する行為」が同時に実現する。

いっぽう、友人関係という関係性では、友人が先に視線を送って娘と目が合うとき、「自分の意見を提示する行為」と「娘の意見が一致していると確認する行為」が同時に実現する。娘が先に視

線を送って友人と目が合うとき、「娘が自分の意見を提示する行為」と「友人の意見が一致していることを確認する行為」が同時に実現する。

したがって、理想自己が決定している母娘ペアよりも、理想自己が決定していない友人ペアの方が、より目が合う回数が多いと予想される。意見が一致していることを演技し、一致していることを確認できたことで意思決定プロセスを楽しむ友人と娘の方が、理想自己の強要と受諾という関係の母親と娘よりも、目が合う回数が多いと予想されるのである。

(c) 頷く

母娘関係においては、頷く動作によって、母親は、娘が提示してくる理想自己が自分の理想自己と一致していれば娘を承認する。娘は、母親の理想自己を受諾し、母親に対する依存を表明する。

友人関係においては、頷く動作によって、友人

は、娘が提示してくる理想自己に対して同意を表明する。時には、本心ではないかもしれないが、演技して同意する。娘も、友人に対して同様の行動をとると考えられる。

したがって、理想自己が決定していない友人ペアが頷く回数の方が、理想自己が決定している母娘ペアが頷く回数よりも多いと予想される。関係性ごとに NVC がどう変わるかについてまとめたものが表2である。

2.4. プロポジションの提示

以上より、本稿が掲げるプロポジションは以下のようになる。

「理想自己の決定主体は、同伴者との関係性によって異なる。」

以下では、上記プロポジションについてさらに深く検討するために行った調査について説明する。

表2 関係性ごとのノンバーバル・コミュニケーションの意味

		母親-娘：支配と依存	友人-娘：同調	
相手を見る	娘	母親の抱く娘の理想自己像の確認。母親への依存、保護されていることへの安心、自己正当化の表れ。	娘	意見の一致および相手の反応の確認。
	母親	自身の抱く娘の理想自己像の強要。	友人	意見の一致および相手の反応の確認。
目が合う		「母親の強要」と「娘の受諾」との同時実現による結果、あるいは、「娘の確認」と「母親の承認」との同時実現による結果。		「意見の提示」あるいは「一致の確認」の同時実現による結果。あるいは相手に合わせるパフォーマンス。
頷く	娘	母親が抱く娘の理想自己像に対する受諾の表明。	娘	相手への同意、相手に合わせるパフォーマンス、および共通点の発見から生起する歓喜の表明。
	母親	「自身の抱く娘の理想自己像」と「娘が提示する理想自己像」が一致した場合の承認の表明。	友人	相手への同意、相手に合わせるパフォーマンス、および共通点の発見から生起する歓喜の表明。

3. 方法論

3.1. カタログショッピングにおけるペア比較

解釈アプローチに依拠しつつ、母娘ペアと友人娘ペアのカタログショッピング行動を直接観察し、収集した定量・定性データを比較する。直接観察法は有効な手法として注目されている。解釈アプローチに依拠しつつも、本研究が注目するデータは NVC というユニークなものである。

調査では、異なる関係性を有するペアに同じ課題を与えて意思決定してもらおう。本研究は、その

行為を解釈し、比較するという特徴的な方法をとっている。具体的には、母娘と友人娘という異なる関係性のペア間による理想自己の決定プロセスにおいて、観察された3タイプの NVC 頻度を比較しつつ、バーバルデータによる補完的解釈も交えて、より豊かな解釈を目指す。

3.2. プリテスト

本研究は、インフォーマントである女子大生にできるだけ自然なコンディションで理想自己を決定してもらうため、「女子大生によるイメージチ

エンジのためのカタログショッピング」という状況を設定し、調査を行った。

同一のインフォーマントが、イメージチェンジのためのカタログショッピングについて、異なる同伴者と一緒に異なる雑誌を用いて2回ずつ行うという方法をとった。その理由は、理想自己概念の決定プロセスにおける異なる関係性の影響について、より効果的に観察するためである。

以下の3点を決定するために2名の女子大生を対象にプリテストを2回ずつ行った。(1)調査状況の設定、(2)インフォーマントの決定、(3)調査で使用するカタログ雑誌の決定である。2名の女子大生に、それぞれ1名ないし2名の友人を連れてきてもらい、理想自己を決定するために自由に喋ってもらった。その発話データを複数の研究者が検討し、以下の3つについて決定した。

(1) 調査状況の設定

データを効率よく収集するために、カタログショッピングという状況を設定した。具体的には、イメージチェンジのためのアウトフィットの選択、自分/他者へのクリスマスプレゼントの選択、パーティーで着る余所行き服の選択などの状況を考慮した。最も自然な状態で理想自己を決定できると考えられる、イメージチェンジのためのカタログショッピングを採用した。

(2) インフォーマント

大学在学の3年次および4年次の女子学生を選出した。なぜならば、1)彼女たちはファッションについて比較的高関与であり、したがって主体的に調査に取組むことが期待できる、2)実際に卒業を間近に控えており、イメージチェンジをより現実的に考えられると推測できるからである。

(3) 調査で使用するカタログ雑誌

さまざまなファッション雑誌やカタログ通販雑誌を網羅的に考慮した上で、百貨店マルイが季節刊行するカタログ通販雑誌「VOI」を選択した。その理由として、1)マルイが調査実施対象者である若者に大きな支持を得ていること、2)調査対象者の間でポピュラーなブランドを網羅的に取り上げていたこと、3)調査対象者にとって関連のあるアウトフィットを

偏りなく取りあげていたことが挙げられる。

3.3. 本調査

本調査のために、首都圏在住で、両親と同居する6名の女子大生インフォーマントに協力してもらい、それぞれ2回の調査に参加してもらった。6名のインフォーマント、陽菜、優那、絵利香、麻優、優、あいは、母親/親しい友人をそれぞれ1名ずつ連れてきた³⁾。ここでは、娘と母親ペア/娘と友人ペアで、娘のイメージチェンジのためのカタログショッピングを行ってもらった。その際、各ペアにはVOIのおかれた机に並んで座ってもらった。普段2人で一緒に雑誌を見ているような、できるだけ自然な雰囲気でお喋りするよう指示した。その上で、娘のイメージチェンジのためのアウトフィットについて、VOIから1点購入するものを選出するよう伝えた。調査においては特に時間制限も設定せず、彼女たちが納得するまで自由にお喋りをしてよいことを伝えた。

インストラクションの後、彼女たちはVOIを閲覧しながら、娘のイメージチェンジについて自由にお喋りした。一通り雑誌を最後まで閲覧するまでの間、気になる商品をピックアップしながら、彼女たちは娘の望ましいイメージチェンジ像、すなわち理想自己についていろいろと話をした。最終的に購入する商品を選択した後、ポストインタビューを行った。特定の理想自己像が確定し、購買対象となる具体的な商品が決定するまでのプロセスとインタビューをビデオで録画し、映像データとして記録した。

今度は、娘に親しい友人/母親を連れてきてもらい、同様の調査を行った。調査内容を同伴者に対して事前に教えないようお願いした。イメージチェンジに使う雑誌はVOIの別の号を使用した。以上の手続きを経て、1人のインフォーマントについて、母娘ペアと友人娘ペアという2種類のデータを収集した⁴⁾。

調査謝礼として、母娘ペアには1万円を渡した。友人と娘にはそれぞれ1,500円相当のギフトを渡した。謝礼として渡したお金は、調査で選択した商品の購入に充当するよう伝えた。本研究における解釈の対象となった5組の母娘ペア、および5組の友人娘ペア、合計15名のインフォーマントのプロフィールをまとめたものが表3および表4である。

表3 インフォーマントのプロファイル：母－娘ペア

娘と母親ペア		年 代		娘の ライフステージ	調査実施日
ペア1	陽菜	娘	20代前半	大学4年生 両親と同居	2007年12月16日
	U	母親	50代前半		
ペア2	優那	娘	20代前半	大学4年生 両親と同居	2007年12月6日
	V	母親	50代前半		
ペア3	絵利香	娘	20代前半	大学3年生 両親と同居	2008年12月6日
	W	母親	50代前半		
ペア4	麻優	娘	20代前半	大学3年生 両親と同居	2008年12月15日
	X	母親	50代前半		
ペア5	優	娘	20代前半	大学3年生 両親と同居	2008年11月24日
	Y	母親	40代後半		

表4 インフォーマントのプロファイル：友人－娘ペア

娘と友人ペア		年 代		知り合っ てからの期間	調査実施日
ペア6	陽菜	娘	20代前半	3年	2007年12月18日
	H	友人	20代前半		
ペア7	優那	娘	20代前半	7年	2008年1月10日
	I	友人	20代前半		
ペア8	絵利香	娘	20代前半	3年	2008年11月25日
	J	友人	20代前半		
ペア9	麻優	娘	20代前半	3年	2008年11月24日
	K	友人	20代前半		
ペア10	優	娘	20代前半	3年	2008年12月16日
	L	友人	20代前半		

3.4. データの収集とデータ化

調査は2台のビデオカメラと1台のデジタルカメラを用いた。1台目のビデオカメラを三脚で固定し、ワイヤレス・マイクを接続して、2名のインフォーマントのインタラクションを録画した。2台目のカメラは、録画可能な書画カメラに接続し、インフォーマントがどのように雑誌を閲覧したのかを記録した。

それぞれのペアが雑誌を閲覧しながら理想自己像を決定するまでの間に観察されたNVC（相手を見る、目が合う、頷く）のデータについて、研究者とは独立の4名のコーダーが、行為の判定と回

数の数え上げを行った。同時に、雑誌閲覧開始からポストインタビューまでで発話された全ての会話の文書化も行った。出来上がったカウントデータと文書データについて、複数の研究者が録画した映像データと複数回つき合わせてチェックし、コーディングの信頼性を高めることを試みた。作業にあたり、1ペアあたり1万円、合計12万円の謝礼を4名のコーダーに支払った。

5名のインフォーマントごとのNVCのカウントと理想自己が決定するまでの所要時間をまとめたものが表5である。

表5 理想自己決定プロセスにおける NVC 回数および所要時間

	インフォーマント陽菜(娘)				インフォーマント優那(娘)				インフォーマント絵利香(娘)				インフォーマント麻優(娘)				インフォーマント優(娘)			
	母親-娘		友人-娘		母親-娘		友人-娘		母親-娘		友人-娘		母親-娘		友人-娘		母親-娘		友人-娘	
NVCの種類	母親	娘	友人	娘	母親	娘	友人	娘	母親	娘	友人	娘	母親	娘	友人	娘	母親	娘	友人	娘
1 相手を見る	1	4	71	38	2	4	8	8	7	3	6	1	6	3	34	20	11	7	21	33
2 目が合う	0		13		0		4		0		0		0		5		5		6	
3 頷く	75	34	89	113	22	13	18	3	8	5	10	4	0	2	78	10	27	28	60	42
4 経過時間	36分47秒		34分47秒		22分20秒		16分55秒		18分45秒		18分25秒		22分56秒		40分30秒		20分45秒		26分45秒	

4. 理想自己決定プロセスにおけるデータの解釈

理想自己の決定主体と決定プロセスに関する解釈を、量的データと質的データの2つを組み合わせで行う。具体的には、5名のインフォーマントそれぞれにおける母娘ペアと友人娘ペアの3つのNVCについて、NVCの回数データとバーバルデータを用いた解釈を行った。3つのNVCとは、(1)相手を見る、(2)目が合う、(3)頷くである。

理論レビューで確認したように、同伴者との関係性によって、理想自己の決定プロセスは異なる。すなわち、母親と娘との関係では、娘は母親が抱く理想自己を知ろうとする。このプロセスは強要受諾過程 (Coercive Process) として特徴づけることができる。一方、友人と娘との関係では、娘は友人と一緒に理想自己を決定しようとする。このプロセスは共同作業過程 (Collaborative Process) として特徴づけることができる。

理想自己の決定プロセスの経過時間は、友人娘ペアのほうが母娘ペアよりも若干長い傾向が確認されたものの、全体としては明確な差異を確認できなかった。具体的には、1ペアが母娘ペアの方が友人娘ペアよりも長い時間を記録していたが(優那: 22分20秒 > 16分55秒)⁵⁾、2ペアは友人娘ペアのほうが母娘ペアよりも長い時間を記録していた(麻優: 22分56秒 < 40分30秒, 優: 20分45秒 < 26分45秒)。残りの2ペアは、経過時間の差が2分以内であったため、同程度とみなした⁶⁾。

以下では、3タイプのNVCの回数を比較し、バーバルデータも交えて解釈を行っていく。

(1) 相手を見る

娘が同伴者を見るNVCは、5ペア中4ペアで、娘が母親よりも友人の方をより見ているという結

果を得た(娘が母親を見る回数/娘が友人を見る回数 $4 < 38, 4 < 8, 3 > 1, 3 < 20, 7 < 33$)。

娘は、母親の意見を求めるために、母親を見る。

娘麻優 「こんなんありえないでしょ?」(目線)

母親X 「ありえない。目にも留まらなかった。」

娘絵利香 「こんなんイメチェンじゃない?」(目線) 大
人びた。」

母親W 「こっちの方が好きだな、でも。」

娘は、友人が自分の意見に同意してくれているかを確認するために、友人を見ていた。

同様に、同伴者が娘を見るNVCは、5ペア中4ペアで、友人の方が母親よりも娘を見ていたという結果を得た(母親が娘を見る回数/友人が娘を見る回数: $1 < 71, 2 < 8, 7 > 6, 6 < 34, 11 < 21$)。

母親は、娘に自分の意見を強要し、娘に受諾させるために、娘を見る。インタビューでも、母親が娘に対して支配的であることが述べられている。

友人は、娘が自分の意見に同意してくれているかを確認するために、娘を見ていた。

友人I 「なんかさあ、かっこいい感じでしょ?」(目線)

娘優那 「かっこいい…。そう、多分。」

友人H 「ヒール、カツカツ音がするのが大人っぽい気がする。」(目線)

娘陽菜 「そうだね。」

相手を見るNVCで、総じて友人娘ペアの方が母娘ペアよりもより高頻度で相手を見る動作を行っていることを観察した。バーバルデータによる補完的解釈からも明らかのように、母娘では、母親は娘の反応を見る必要がなく、娘も友人同士のような確認作業を必要としないため、相互に相手

を見る動作は低頻度となっていたと考えられる。他方、友人同士では意見や反応一致を確認したり、共感を表明したりするために、相手を見る動作をより多く必要としていたようである。

(2) 目が合う

娘と同伴者の目が合う NVC で、5ペア中4ペアで、友人娘ペアの方が、母娘ペアよりも、より相互に目が合うという傾向を観察した(母娘ペアで目が合う回数/友人娘ペアで目が合う回数:0<13, 0<4, 0=0, 0<5, 5<6)。

この結果は、相手を見る NVC の回数とも整合的である。母娘ペアによる理想自己の決定プロセスと、友人娘ペアによるプロセスが異なることを示している。

母娘ペアでは、母親からの理想自己の強要と、娘によるその受諾が同時に実現した結果として目が合う動作が確認された。

母親 Y 「(これは) 普段履かなさそうだけど。(目が合う) (私があなたに) 履いて欲しくないのは選ばなくていいんでしょ？」

娘優 「(お母さんは私に) 着て欲しくないのあるでしょ？」

母親 Y 「逆に、(私があなたに) 着て欲しくないのは選ばなくていいんでしょ？」

友人娘ペアでは、相互に意見を提示し合ったり、お互いの反応を確認し合ったりすることで目が合う NVC が生起していた。必要に応じて相手に合わせるパフォーマンスも行っていった。

友人 H 「あっち、結構カジュアル的な感じじゃない？ (目が合う)」

娘陽菜 「かわいい系な感じ。」

バーバル・データでは、相手に合わせるための言葉の反復が発生していた。

娘優 「これ、履かないね。」

友人 L 「(頷く) 履かないね。」

娘優 「こういうやつかな。」

友人 L 「でもなんか...あー、そうなのかもねー。」

娘優 「全部、違うんだよね。」

友人 L 「ワイドパンツの方がよくない？」

娘優 「あー。これねー。うーん。(ボーダー柄は) そんなに着ないな。」

友人 L 「ボーダー着ないね。」

娘優 「ボーダー着ないね。なんか、囚人みたいに

見えない？」

友人 L 「うふふ。」

娘優 「危ない感じが。」

友人 L 「危ない感じが。」

(3) 頷く

娘が頷く NVC で、母娘ペアと友人娘ペアの間に、明確な差異は確認されなかった(母娘ペアにおいて娘が頷く回数/友人娘ペアにおいて娘が頷く回数: 34<113, 13>3, 5>4, 2<10, 28<42)。娘が頷く NVC は、同伴者との関係性によってさまざまな意味を含んでいることが考えられる。

補完的にバーバルデータも用いて解釈を行ったところ、娘は、母親の意見を受け入れたことを表明するために頷く可能性があることが確認された。

母親 Y 「これも結構かわいいね。」

娘優 「うん。(頷く)」

母親 W 「(私は) こういう感じ好きなんだよね。(目線)」

娘絵利香 「言ってたね。(頷く)」

同時に、娘は、友人に同意していることを表明するために頷くようである。

友人 H 「なんか、足の肌見せが多い気がする？」

娘陽菜 「そうだね。(頷く) なんか、ミニ丈、かわいいとか言いつつ、私が選んでるのって、肌見せ少ない感じの方が多いかも。」

友人 H 「うん。(頷く) 陽菜ちゃん、あんまり肌見せるイメージ無い。」

娘陽菜 「うん。(頷く) そうだね。肌見せしないね。」

以上の結果を整合的に解釈することは困難であるが、少なくとも、娘が母親と一緒にの場合と友人と一緒にの場合とで、異なった意味が込められた頷きを行っていたことが確認された。多様な意味が込められる頷きという NVC は、関係性やコンテキストによってその回数も異なるようである。

同伴者が頷く NVC については、5ペア中4ペアで、友人は母親よりもより多く頷く傾向を確認した(母親が頷く回数/友人が頷く回数: 75<89, 22>18, 8<10, 0<78, 27<60)。母親は、娘に無理に同意する必要がなく、自らが抱く理想自己概念と娘の意見が一致した場合のみ頷いているからであ

ろう。他方、友人は、娘に対して意見の同意や共感・歓喜の表明、相手に合わせるパフォーマンスとして頷く必要が高かったからであろう。

補完的に行ったバーバルデータの解釈からも、同様の発見があった。すなわち、母親は、娘が提示する娘の意見を承認するために頷くようであった。

娘陽菜 「こういうパンツ履いてみたい。」
母親U 「あ、そう。へえ。(頷く) 付箋を貼っていたら？」

母親U 「うん。かわいい。あはは。」
娘陽菜 「別に(付箋を貼らなくても)いいよ。好きじゃなかったら。」
母親U 「無理やり(付箋を貼らされた)。え？」
娘陽菜 「どっち? いいの？」
母親U 「うん。大丈夫よ。(頷く)」

いっぽう、友人は、娘に同意していることを表明するために頷くようであった。

娘絵利香 「これ、ちょっとかわいい。」
友人J 「ほんとだ。」
娘絵利香 「これ、今っぽくない?(目線)」
友人J 「(頷く)」

以上3つのNVCの解釈から、母娘ペアと友人娘ペアで、理想自己の決定主体と決定プロセスが異なる可能性があることが確認された。

5. ディスカッション

5.1. 発見物

本稿が実施した調査は、以下の2点を明らかにしている。第1に、理想自己の決定主体は、消費者のおかれたコンテキスト(本研究では消費者と同伴者との関係性)によって異なる。すなわち、娘がイメージチェンジにおいて望ましい自己像を決定する際、母親が同伴者として同席していると、娘の理想自己を決定するのは娘本人ではなく、母親であった。一方、娘の友人が同伴者として同席していると、娘と友人という2主体が協同で理想自己を決定していた。

第2に、理想自己の決定プロセスも、同伴者との関係性によって異なる。具体的には、母親が娘に同伴する場合、母親は娘に対して自分が抱く理

想自己を強要しようとする。同時に、娘は母親が抱く理想自己を確認し、母親の理想自己像を自分のものにしようとする。いわば強要受諾過程(Coercive Process)である。一方、友人が娘に同伴する場合、お互いが相手に合わせ、共感体験を楽しみ、相手の反応を確認したり、必要に応じて演技したりする。協同過程(Collaborative Process)である。

5.2. 課題と展望

本研究は興味深い2つの発見をしたものの、課題も有している。第1に、母親と娘との関係性の中に確認された特殊性と、拡張自己概念との関連の解明が不十分である。具体的には、なぜ母親は娘に対して明確な理想自己像を形成しており、それを娘に強要するのか。この特殊な行為そのものは、母親にとっていかなる意味を有しているのか。本調査は、絵利香の母親Wが、娘を、あたかも自分が叶えられなかった理想自己像を仮想的に実現するためのツールのように捉えている様子を確認した。娘が母親の拡張自己としての役割を有しているのである。このような視点を盛り込むことによって、関係性の更なる解釈に資することができると考えられる。

第2に、関係性の多様な側面に対する配慮が欠けている。母親-娘関係と友人-娘関係という2つの関係性について、本研究は単純な類型化を行っているに過ぎない。特に友人関係では、本調査での優那と麻優で、友人との理想自己の決定プロセスに要した時間が著しく異なっていた(16分55秒と40分30秒)。この点に関して、優那と友人Iとの関係性の時間的継続性が根拠として考えられるものの、友人関係はそのような単一的な解釈によって理解すべき性質のものではない。母娘関係も含め、関係性そのものに多様性を認める視座は、より豊かな解釈をもたらすものと期待できる。

第3に、本研究が行った解釈手法は、異なるペアに理想自己を決定させ、そこで発生するさまざまなNVCを比較するというユニークな方法である。この方法はより幅広い視点からの解釈をもたらせた一方で、問題も有する。例えば、本研究が取り上げた3つのNVC以外にも、「笑い」「間(ポーズ)」「首をかしげる」などのNVCがある。こ

これらの NVC を加えることで、より深い解釈が可能となるであろう。単一の NVC の単独比較ではなく、複数の NVC、バーバルデータ、コンテクストといった多様なデータを相互に組み合わせた解釈も行わなければならない。本研究は、このような解釈の複雑性を考慮することは試みなかったが、多様なデータを組み合わせた解釈によって、関係性の更に微細な差異まで明らかにすることが可能となるであろう。

しかしながら、本研究が有するこれらの限界は、あくまでも今後の研究の方向性を示すものであり、本調査によってもたらされた発見物の価値を減じるものではない。今後は、さまざまな方法によって観察されたデータを組み合わせることによって、消費者の意味世界の更なる解釈が期待されるところである。

〔注〕

- 1) 「同一化」と呼ぶものの、母親が娘に期待するのは、娘が「自分と同じようになること」とは限らない。母親の欲求は、しばしば非現実的なまでに高いものになる。例えば、一方で男性に匹敵する業績を上げることが期待し、他方で男性が与えられない女性ならではの喜びを与える存在になることを期待する。
 - 2) たとえば、『金の鳥籠(ゴールデンケージ)』という概念は、恵まれた状況によって拘束されているという逆説的な状態を表わしている(斎藤 2004)。
 - 3) インフォーマントの名前は仮名である。なお、最後のインフォーマントあいは、理想自己の決定プロセスに要した時間が極めて長かった。他のインフォーマントと比べて母娘の関係性が特殊であることが予想されたため、今回の解釈の対象から除外した。
 - 4) 母娘ペアと友人娘ペアの調査順序で、6名のインフォーマントについて、調査順序をカウンターバランス処理した。
 - 5) 優那—友人ペアの16分55秒は全ペアの中で最も経過時間が短い。この理由として考えられるのが、優那—友人ペアの関係の長さである。今回の調査に協力してくれた他のインフォーマントは、すべて大学に入学してから親しくなった友人を連れてきていた。これに対し、優那だけは、中学時代からの親友を連れてきていた。優那—友人ペアはかなり親しい間柄で
- あり、したがって相互に自己モニタリングを行ったり、相手に合わせるパフォーマンスを行う必要性が低かったと推測できる。
- 6) 特に、絵理香は、母親ペアの場合も友人ペアの場合も、経過時間が短かった。以下で行う NVC のカウントについても、他のインフォーマントとは異なる傾向を示していた。さまざまな理由があると推測されるが、今回観察されたデータから明確な解釈を行うことはできなかった。

〔参考文献〕

- Belk, Russell. (1988), "Possessions and the Extended Self" *Journal of Consumer Research*, 15, 139-168.
- Blos, Peter. (1962), *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*, Free Press.
- Bruch, Hilde. (1978), *The Golden Cage: The Enigma of Anorexia Nervosa*, Harvard University Press. (岡部祥平 他訳『ゴールデンケージ—思春期やせ症の謎』星和書店, 1979年。)
- Costanzo, P.R. and Shaq, M.E. (1966), "Conformity as a Function of Age Level," *Child Development*, 37, 967-975.
- Erikson, E. Homburger. (1967), *Identity and the Life Cycle: Selected Papers*, No. 1, International Universities Press, Inc. (小此木啓吾訳『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房, 1973年。)
- Higgins, E.T. (1987), "Self-Discrepancy Theory: A Theory Relating Self and Affect," *Psychological Review*, 94, 314-340.
- Hoffman, J. (1984), "Psychological Separation of Late Adolescents from Their Parents," *Journal of Counseling Psychology*, 31 (2), 170-178.
- 深田博己『インターパーソナルコミュニケーション』北大路書房, 1998年。
- 福原省三「凝視」「親和葛藤理論」「身振り」小川一夫 監修『改訂新版社会心理学用語辞典』北大路書房, 1995年。
- Jacobson, Edith. (1964), *Self and the Object World*, International Universities Press Inc. (伊藤沈訳『自己と対象世界—アイデンティティの起源とその展開(現代精神分析双書 第2期第6巻)』岩崎学術出版社, 1990年。)

- 木村純子・坂下玄哲「カタログショッピングにおける購買意思決定プロセスに関する研究—同伴者による比較」『経営志林』第46巻第1号, 2009年。
- Klein, Melanie. (1984), *The Psycho-Analysis of Children: The Writings of Melanie Klein vol. 2*, Free Press. (小此木啓吾他訳『メラニー・クライン著作集2: 児童の精神分析』誠信書房, 1997年。)
- La Gaipa, J.J. (1979), "A Development Study of the Meaning of Friendship in Adolescence," *Journal of Adolescence*, 2, 201-213
- Lerner, Harriet. (1998), *The Mother Dance: How Children Change Your Life*, Harper Collins. (高石恭子訳『女性が母親になるとき—あなたの人生を子どもがどう変えるか』誠信書房, 2001年。)
- McCraken, Grant. (1988), *Culture and Consumption: New Approaches to the Symbolic Character of Consumer Goods and Activities*, Indianapolis: Indiana University Press. (小池和子訳『文化と消費とシンボルと』勁草書房, 1990年。)
- Mead, George H. (1913), "The Social Self," *Journal of Philosophy*, 10, 374-380. (船津衛他訳『社会的自我』恒星社厚生閣, 1991年。)
- Mead, George H. (1934), *Mind, Self and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, The University of Chicago Press. (秋葉三千男他訳『現代社会学大系10精神・自我・社会』青木書店, 1973年。)
- 岡田努『現代青年の心理学』世界思想社, 2007年。
- Rogers, C.R. (1959), "A Theory of Therapy, Personality, and Interpersonal Relationships, as Developed in the Client-Centered Framework," in *Psychology: A Study of Science, Formation of the Social Context*, Vol. 3, ed. S. Koch, New York: McGraw-Hill, 184-256. (伊藤博編訳『ロジャーズ全集第8巻: パースナリティ理論』岩崎学術出版社, 1967年。)
- 斎藤学『アダルト・チルドレンと家族—心のなかの子どもを癒す』学陽書房, 1996年。
- 斎藤学『インナーマザー—あなたを責めつづけるころの中の「お母さん」』新講社, 2004年。
- Schouten, John W. (1991), "Selves in Transition: Symbolic Consumption in Personal Rites of Passage and Identity Reconstruction," *Journal of Consumer Research*, 17, 412-425.
- Snyder, M. (1974), "Self-Monitoring of Expressive Behavior," *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 高石浩一『母を支える娘たち—ナルシズムとマゾヒズムの対象支配』日本評論社, 1997年。
- 高垣忠一郎「自分をつくる」心理科学研究会編『かたりあう青年心理学』青木書店, 1988年。
- 田中熊次郎『新訂児童集団心理学』明治図書, 1975年。
- Wheeler, L. and Nezlek, J. (1977), "Sex Differences in Social Participation," *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 742-754.